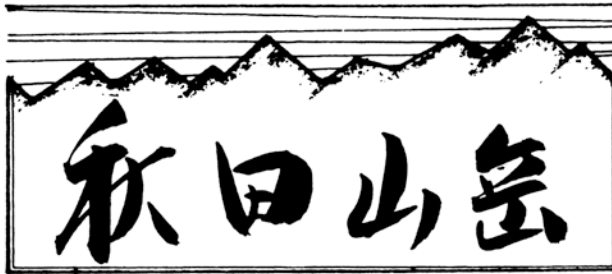


2023



令和5年11月 発行

No. 128

公益社団法人 日本山岳会秋田支部

秋田市土崎港北
5-3-40 鎌田方

TEL・018-846-8150

発行 秋田支部

編集 鈴木裕子

秋の支部山行

支部山行 高岳山・浦城城址 小松芳美

令和五年度の秋山山行を何処にするかを事務局会議で話し合い、九月三十日(土) 八郎潟町の高岳山(二二一m)と三等三角点のある鳥越山(二二一・七)と決定した。

高岳山は秋田市から近く、低山なので浦城本丸跡の散策をプラスし、五城目町朝市の開催日でもあることから、朝市も見学することとした。

当日、三十日の天気予報は「くもり、雨」、更に晴男の鎌田副支部長が急きょ欠席と、天候は微妙であったが、持ちこたえてくれることを期待して出発した。
五城目朝市では、各自が店主との会話を楽しみながら、秋の味覚などを購入していた。

浦大町の副川神社隣の登山口のある駐車場で参加者確認、鈴木顧問のあいさつ、及びコース説明などをを行い、九時三十六分出発。

副川神社里宮を過ぎ、いきなり階段状の急勾配に挑む。

かなりの急登で、かつ、山ヒルの生息地であるが、ヒルは姿を見せず静かに見守ってくれた。

後日、ヒル被害に遭った会員がいたことが判明。出発時の気温が

二十一度なのでヒルが出る可能性があったのかも？

汗をかきつつ最初の目的地の常夜燈に辿り着く。一服し、八郎潟や男鹿半島の景色を楽しむ。

ここから再出発し、副川神社奥宮(高岳山)に十時十三分到着。

参加者から、神社の参拝方法などのレクチャーを受けるなど教養的な山行となった。

神社裏手の歩道を進み、3等三角点のある鳥越山・一本桜見晴台で、集合写真を撮影してから早めの昼食会。

某会員の「おにぎり忘れ怪事件」などがあり、笑いもおかずにはせていただいた。

下山は急坂を慎重に進み、叢雲の滝を経て、室町時代末期に設けられた、三浦氏の山城・浦城本丸跡など整備された登山道を散策した。

終盤に天気予報通り雨が落ちてきたが、概ね天候に恵まれた秋山行を満喫できた。

全員の下山を確認し、佐々木顧問のあいさつで十三時三十三分散会となった。

行動時間三時間五十六分、距離三・六キロ

参加者 佐々木民秀 若月寿

鈴木裕子 堀井弘 佐藤博

柴田勸 後藤浩二 三浦昭男

小松芳美 会員外五名

※ 森山(五城目町)にもヒル出現



一本桜見晴台で

ご注意を。

新入会員紹介

渡部 昌 輝 (二十六才)

会員番号 一七一四九

居住地 秋田市広面

入会 令和五年七月

紹介者 鈴木裕子 鎌田倫夫

第三十六回全国支部懇談会

佐々木 民 秀

九月二十三日、二十四日、群馬県水上町で、群馬支部担当の全国支部懇談会が開催された。全国からの参加者は百五十八名。

上毛高原駅からホテル迎いのバスに乗り、会場の坐山ホテルへ。

午後四時三十分からの講演会は「今、谷川岳で考える安全登山」と題して、群馬県警察谷川岳隊長伊藤武氏から、山岳遭難について実際の経験からのお話があった。

十六時三十分からの懇親会では水上町長から歓迎の言葉があり、全国各地から集まった会員で大賑わい、広い会場には百六十ものお膳が並び、昭和時代の宴会を思わせた。

翌、二十四日早朝、ホテルからバスで慰霊公園先にある、谷川岳インフォメーション駐車場へ移動し、六班に分かれて一ノ倉沢眺望地へ九時十分出発。我々はA班で北海道支部や首都圏の会員と共に四方山話をしながらウオーキングロード(車道)を辿る。

マチガ沢出合いを経て一ノ倉沢眺望地へ十時二十五分到着し、迫力ある大岩壁を眺め楽しむ。

一行百六十名程の大集合記念撮影後帰途に就く。

谷川岳インフォメーション駐車

場で昼食を頂き、午後一時ころ散会した。

日本三大岩壁の一ノ倉は、何度来て眺めても飽き足らず、懐かしい一日を過ごさせて頂いた。

予備日とした翌二十五日も晴天となり、谷川岳へ向かう。宿泊した天神ロッジすぐ先の谷川岳ロープウェイで天神平へ。

午前八時四十五分、今野さんと出発。鈴木さんは天神山や天神尾根一帯を散策すること。

マイペースの小生は、今野さんに先に行って頂き、木道や細石で整備された道を、ゆっくり休まず進む。熊穴避難小屋でかつてを偲び、(水上からのコースは廃道)露岩の続く坂道を登って肩の小屋へ。

すぐ先のトマノ耳に十一時十分到着。撮影後、オキノ耳に向かう。途中で下山してくる今野さんと会い、トマノ耳で合流することに。

十一時三十分、オキノ耳(一九七七m)に到着。

青春時代に登ったマチガ沢や一ノ倉沢を見下ろし、共に登り、先に逝った岳友の面々を偲ぶ。

山頂には十五名程度いたが、この山に初めて登る人々は多く、周辺の谷や山を説明。私は年齢を問われて八十八才と答えると驚かれ、

そして米寿を祝って頂くなど良き記念登頂となった。

トマノ耳から今野さんと下山。下山途中で集会に参加した元富山支部長の山田さんや北海道支部長の藤木さん等と出合い、肩ノ小屋で記念撮影。昼食を摂る彼らと別れし、午後二時頃天神平らに下山した。

参加者 佐々木民秀 今野昌雄

鈴木裕子

この日の登山者は八十名程。三代から五十代多く、男女半々、単独、ペア、仲間同志が多く、殆どが首都圏。グループやガイド付きには会わなかった。後期高齢者激減。ストックの方少なし、等々であった。



一ノ倉沢を望む

太平山縦走路

(中岳・宝蔵岳)の

刈払作業に参加報告

歩仁内 昌 樹

七月十五日からの豪雨により、太平山では四十八時間雨量が四百六ミリと観測史上最大の記録となり、仁別林道及び旭又コースは甚大な被害を受け復旧までに数年かかると言われていた。

太平山奥岳への登路として唯一被害を受けなかったのが前岳・中岳・宝蔵岳を経由する二手ノ又(木曾石)コースであるが、全長約九キロの上級者向けの縦走コースで、近年はヤブ化が進行して足元が見えず危険な状況であった。

何かできることはないだろうかと思っていたため、中央地区山岳協議会からの刈払作業への協力依頼には喜んで参加させてもらった。

刈払作業には秋田山岳会、河辺山歩会、三吉神社関係者など十一名が従事し、九月二十七日、二十九日、三十日の三日間で中岳から宝蔵岳までの刈払いを完了することができた。

私が参加したのは一日だけであったが、この区間は足場の悪いトラパスが続いて、何よりも刈払機を担いで作業現場まで三時間歩くのは難儀なものであった。

国指定史跡「鳥海山矢島口道者道（登拝道）
探索会に参加して
鎌田倫夫

由利本荘市矢島町在住の佐藤助雄委員からの案内で、修験者が歩いた旧登山道を散策しながら紅葉を楽しむのが目的の一般募集であったが、日本山岳会百二十周年記念事業の「全国山岳古道調査」にも決定していることから、参加することにした。残念ながら佐藤委員は所要のため欠席したが、新入会員の渡部昌輝さんにも声掛けしたところ、参加してくれた。

令和五年十月八日（日）、五時三十分。秋田支部員集合場所の御所野はまだ薄暗いが、外の登山グループも何人か集まり始めている。挨拶しながら訪ねると東鳥海山や乳頭山・秋田駒ヶ岳縦走などの予定であった。

散策会の受付場所の「日新館」は矢島駅の近くにある。前日までの雨空が気になっていたが天候が回復し、八時に一般参加者二十五名とスタッフ十名がバスで道者道の起点まで移動して、主催者の「道者道を復元する会」からの挨拶と説明に続き準備体操後に探索を開始した。

猛暑のため例年に比べ幾分紅葉が遅れている山中を現在の登山口

である祓川まで旧道を登った。通行車両に気を付けながら車道を何度か横切りながら標高を上げていく。途中、道銭小屋跡、木境大物忌神社（二合目）、開山神社、仁乗上人碑などで説明をしてもらい、昔は矢島駅から歩いて神社に宿泊し、鳥海山頂上を目指して登山した者も少なくなかったという。



仁乗上人碑の前で
説明を受ける

休憩に用意してくれたイチジクの甘露煮とコーヒールは大変美味しかった。

これまで何度もこのコースを利用して鳥海山に登山しているのに車で素通りするだけであった。

駒の王子（三合目）は馬が登れるのはここまでで、荷物はこれより人力で運んだそうだ。

善神長根の途中にある「鬼石」はよく見ると人間の横顔のようである。

祓川第二駐車場に出ると現在の登山口である祓川ヒュッテ（五合目）にまもなく到着である。

ヒュッテでの昼食時にスタッフが用意してくれた芋の子汁がとても旨かった。

昼食後、善神沼（四合目）まで下山し、沼を一周してから、バスで日新館に戻って解散式となった。企画してくださった由利本荘市、由利本荘市教育委員会、矢島山岳会の皆様にはお礼申し上げます。

解散後、資料館となっている日新館を見学して鳥海山の歴史を学び秋田市に向かった。

参加者
鎌田倫夫 後藤浩二
小松芳美 渡部昌輝



祓川ヒュッテ（後方は竜泉ヶ原湿原）

山岳古道調査状況

横手市と西和賀町を訪問

三浦昭男

白木峠古道調査は、現地調査もほぼ整い、これからの作業は取りまとめに移るところである。そのため、関係する自治体の協力を得て、現地での位置確認、歴史的背景や文献の照合確認等を行う必要があり、当支部から横手市と西和賀町に調査への協力を依頼し、打ち合わせを行うこととした。

九月二十七日（水）に、横手市と西和賀町を訪問し、古道調査への協力依頼の文書を提出した後、其々の場所で行った。

○横手市

午前十一時から山内地域局

山内地区交流センター

センター長 永沢弘氏

○西和賀町 午後二時から

教育委員会生涯学習課

主査 高橋竜也氏

出席者

三浦昭男 小松芳美

高橋雄悦

※全国山岳古道調査

日本山岳会百二十周年記念事業調査期間は令和三〜令和七年度全国で百二十の古道を調査予定

○山岳古道調査オンライン会議

・八月二日(水)
 ・九月六日(水)
 本会古道調査担当者との
 月例の調査状況等情報交換
 ・十月四日(水)
 ホームページの進捗状況として
 「古道トップページをテスト公
 開」する。会員限定で閲覧できる。
 矢島街道は取り下げた。代わりに
 「二本杉峠・旧天城峠」を充て
 たいと考えている。

出席者 後藤浩二 三浦昭男
 小松芳美

令和五年度支部連絡会議

後藤 浩 二

○六月八日(木)

オンラインで開催。本部、支部
 合わせて六十名が参加。
 午後七時柏澄子総務担当常務理
 事の司会進行で始まり、九時終了。
 会議の目的は、
 1 令和四年度決算報告。
 2 財務状況の報告。
 3 財政改善のための意見交換。
 ・古野会長あいさつ
 今の会議の主目的は財務状況を
 把握し、非常に厳しいこの状況を
 本部支部で共有することである。
 財務状況説明や各支部活動状況を
 把握して、それぞれの発展の参考
 としてもらいたい。

・南久松財務担当常務理事
 五百万円を超える赤字が二年続
 いている。過去五年間で三年は赤
 字決算。会員の減少により年々会
 費収入は減少している。
 事業収益が多い年はその事業費
 用も多くなり、赤字とはリンクし
 ない。方向としては、会員を増や
 す、又は経費を減らすことになる
 が、会費の増額については退会者
 増のおそれがある。収益を増やす
 事業が必要である。

・柏澄子常務理事から会員数の動
 向について
 二〇〇二年以降二〇一二年を除
 き退会者が入会者を上回り会員数
 が減少、近年はその差が大き。
 年齢構成も七十代が最も多く高
 齢が進んでいる。
 ・上高地山岳研究所について
 年間五百万円の赤字(内三百万
 円は人件費)。利用料金については
 設立・許可の経緯から利用者増や
 値上げは難しい。ただし会員外の
 費用については値上げしたい。
 ・支部からの質問・意見

① 経費削減について
 出版物「山」については、現行
 毎月の発行を二ヶ月に一回とし、
 郵送料の削減。また、デジタル化
 できないのか(なかなか踏み切れ
 ないでいる)。
 ② 入会金の二万円について
 会員募集のネックになっている。

支部で補助しているのは、岐阜、
 石川、東海、広島など。年齢によ
 り金額に差をつけている支部もあ
 った。
 ③ 永年会員からの会費の徴収
 これからは永年会員が多くなる
 会費の半額でも徴収することがで
 きないか(公益法人の定款で定め
 られており無理である)。
 ④ 会員増のためには、入会金・
 年会費など金額の問題だけでなく、
 会そのものの魅力がなければなら
 ない。(京都・滋賀など)

「支部の活動事例」
 登山教室の取り組み(群馬)、
 登山技術を教えるための工夫を
 毎年行う(北海道)、
 ホームページの刷新充実(千葉)
 等を行っている。

出席者 後藤浩二 小松芳美

○九月二十一日(木)オンライン
 で開催。本部、支部合わせて五十
 名が参加。六月の総会で改選され
 た新たな役員体制での初会議。午
 後七時、長島総務担当常務理事の
 司会進行で開会、八時三十分終了

一 財務状況の再認識(南久松常
 務理事) 毎年五〇〇万円超の赤
 字が続くが、これをどうするか。
 二 収入確保の施策(会員数の維
 持、増加)
 ① 松田理事から支部アンケート
 結果の概要報告

② 入会金減額は是非
 減額すれば現会員と不公平になる
 ので反対。との意見と若年層の入
 会に明らかにネックになっているの
 でせめて一定の年齢以下には減額
 すべきであるとの意見。

三 コスト削減 目標五〇〇万円
 三〇〇万は本部管理費の減額
 (職員の減員)、二〇〇万円は郵送
 費の減額
 ・会報「山」の電子配信
 可能な数支部で試行、来年三月
 の支部連絡会議で結果発表。
 秋田支部は高齢会員が多く、ネ
 ット環境がない会員も多い、との
 課題もある。

四 その他 新支部担当
 桐生理事、松田理事が担当

出席者 後藤浩二 三浦昭男
 小松芳美

会 務 報 告

○事務局会議

・十一月十日(金)午後一時から、
 秋田市泉コミセンで開催。
 会報百二十八号等発送。

出席者 鎌田倫夫 三浦昭男
 小松芳美 鈴木裕子

クマ注意!

